

緊縛モデルの素顔 (その一)

辻 村 隆

本誌に掲載されたものや、アルバム「美しき縛しめ」並に分譲の写真集を通じて、諸氏がお馴染みの緊縛モデル嬢については、その都度小文や雑文で紹介して来たが、今以て、交際、お問合せ、私的の交通を希む方が跡を絶たない。

彼女達のプライベートな面を、完全に剔抉し、御満足のゆく様書き現わしたいのは山々であるが、彼女達のうち、一、二のモデルを専業とする人たちを除いては、殆んどが普通の娘さんであり、家庭的に、対外的に差支えのある人達許りなので、私も彼女達のプライベートの面に関しては、今迄殆んど触れた事がなかった。

度重なる諸氏の懇望もあり、編集長にも一

応の諒解を得たので、私が今迄緊縛したモデルの、その許される範囲内に於て、彼女達の性癖、趣味、素描を、赤裸々に掘り下げて見たいと思う。

——川端多奈子——

緊縛モデルには、何を措いても先ず一番に川端さんを挙げねばなるまい。

事実、私は川端さんを緊縛した回数が最も多い。(川端多奈子という名は勿論本名ではないが、始めの二、三回の外、私も編集部の人々も川端さんと呼ぶ様になった。誌上に、又読者の通信に川端の名が宣伝されてからはその方が反ってピッタリしたからだ)

始めて川端さんと逢ったのは、昭和廿七年の六月中旬頃だった。恰度奇クがB5判の大

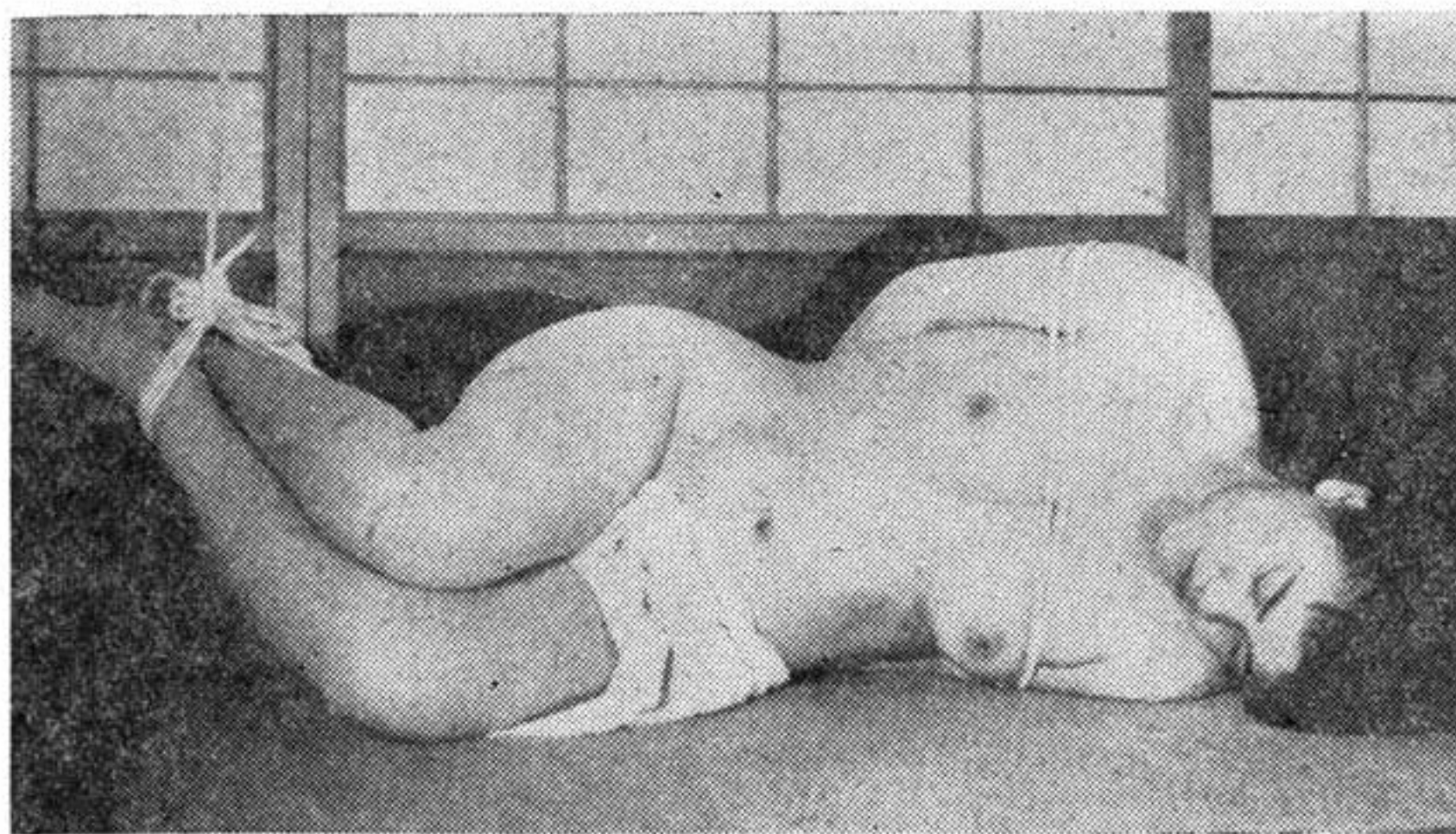
型に行き詰り、A5判本に移行した当時だったと覚えている。当時の懐かしい思い出として、今も私の記憶を去らないのは、川端さんが緊縛の本格的構成をした最初の人だからでそれ迄にも立花郁子さんを縛ってはいるが(廿九年十月号「モデル女のマゾヒズム」参照)立花さんの場合、未だ実験的な試みに過ぎず、構成を考える迄には至っていなかったのである。

郊外電車の或る駅で、私はその日の午前十一時頃、途中で落合った編集長の箕田氏と共に彼女を待った。

「彼女には因果を含めて、同行者があるとは云っておきましたかねえ」

と、それ迄一、二度ヌードに彼女を使った

一番最初に撮影したもの（川端多奈子嬢）



ことのある箕田氏は、既に約束の時間を二十分許り過ぎた腕時計を見て、些さか不安そうにした。

——ヒョツとしたら、私の出現を恥かしがって来ないのではなからうか——。

私は彼女への、初の計画的緊縛構成の期待に胸を疼かせ乍ら、多分の焦燥と危惧にかられていた。

「来た来た。矢張り来ましたよ」

伸び上げる様にして箕田氏は、今着いた急行の電車から、ドヤドヤ吐き出される群衆の中に、逸早く彼女を見付けて小さく叫んだ。

水玉のワンピースの軽装に白のサンダル、つばの広い紫のリボンをつけた帽子にかくれたはにかんだ微笑——、それが川端さんの最初の印象だった。

紹介された瞬間、川端さんは目に見えて顔を赤くパツと染めた。私も恐らくはドキマギして、顔を赤らめたのではなからうか——。

今にして思うと、如何にもうぶな初会で、大人しくて口数も少なかった彼女が、あの様に典型的マゾヒストになろうとは、其の時は夢想だにもしなかったのである。

川端さん自身、容貌には自信なかった様であるが、事実余り美人とは云えなかった。特にニヤツと笑った時など、顔中が皺になり、眼が細くなって、すきまの多い味噌っ歯が剥き出されるのには閉口した。年に似ぬ囁れ声

も奇妙に感じた。（川端さんが初期だっただけに、殆んどメーカーヤツプらしきものを施さなかったのは、確かに私達の手落ちで、ヌードにも、馬子にも衣裳の必要があったとは後々気付いたことである。その当時緊縛ヌードは縛りさえすればと云う先走った観念が、こうした心配りを忘却させていた）

にも拘わらず、彼女の牝鹿の如くキュツと引緊った肉体は、緊縛に最もふさわしい条件をすべて備えていた。体重も十三貫少々で頃合だし、皮膚にたるみのあった立花さんに較べては、全く素晴らしいと思った。

箕田氏の緊縛の説明に、彼女は無言でコックリうなずいただけだった。

予め約束していた××荘で、四、五時間に亘る五本の緊縛のフィルムを撮り終る迄、私は無我夢中のうちに、かねての思い通りのものを十二分に駆使した。

ぐっと張った胸のふくらみ、くびれた胴、堅くしまった双臀もさる事ながら、緊縛に対する驚く程の忍従力の強さ、柔軟な骨格、如何なるポーズに対しても無言の許容——すべては緊縛のモデルにピッタリと嵌っていた。

それが川端さんをマゾヒストにかり立てる一里塚とも知らずに、私と箕田氏は、互に顔

を見合せて、その成功を喜び合った。

それからは室内で五回、野外で一回と、都合六回に亘って、私は川端さんを凡ゆる角度から、今迄持っていたアイデアを駆使してさまざまなに緊縛した。回を追うに従って、あたかも階段を一步一步昇りつめる様に、時には逆吊り専門に、或る日は海老責、雁字搦目にアクロバチックそのものの姿に縛り上げて、緊縛の頂上にと昇りつめて来た。

その間、彼女が四国の松山の生れで、友達に誘われて来阪し、一、二度職を転々し、今は某商事会社の事務員である事も知り得た。

川端さんは内気で温馴しく素直であった。その素直さ故に、凡ゆるポーズにも易々として拒むことなく、相当の肉体の苦痛をもちらえて盲従した。彼女の体内に多分に沈潜されていたマゾの要素が、緊縛によって抽出せられ芽をふいて、典型的マゾヒストに変貌し果てたのかもしれない。

始めて緊縛を頼んだ時、誰しも一応それに躊躇するか、拒絶するのが普通であるが、川端さんに限っては、無言の肯定が、寧ろその行為を迎合したのではないかと思うふしさえ多分に感じとられた。彼女としては衷心より人知れず、希むところであったのかも知れな

い。

殊に激しい緊縛の場合、例えば逆吊りや不自然なポーズによる緊縛の、長時間に亘った時、彼女は屢々マゾヒスチックの境地に陥った。眼を細め、唇を少し開き気味に、薄すら笑った様な顔になって、そのトキとトコロをわきまえての、懸命の抑制にも拘わらず、無意識に吐く嘆息は激しく、口を洩る動物的な小声の叫びは、私達もドキリとする程の生々しさをこめて耳をつく事があった。

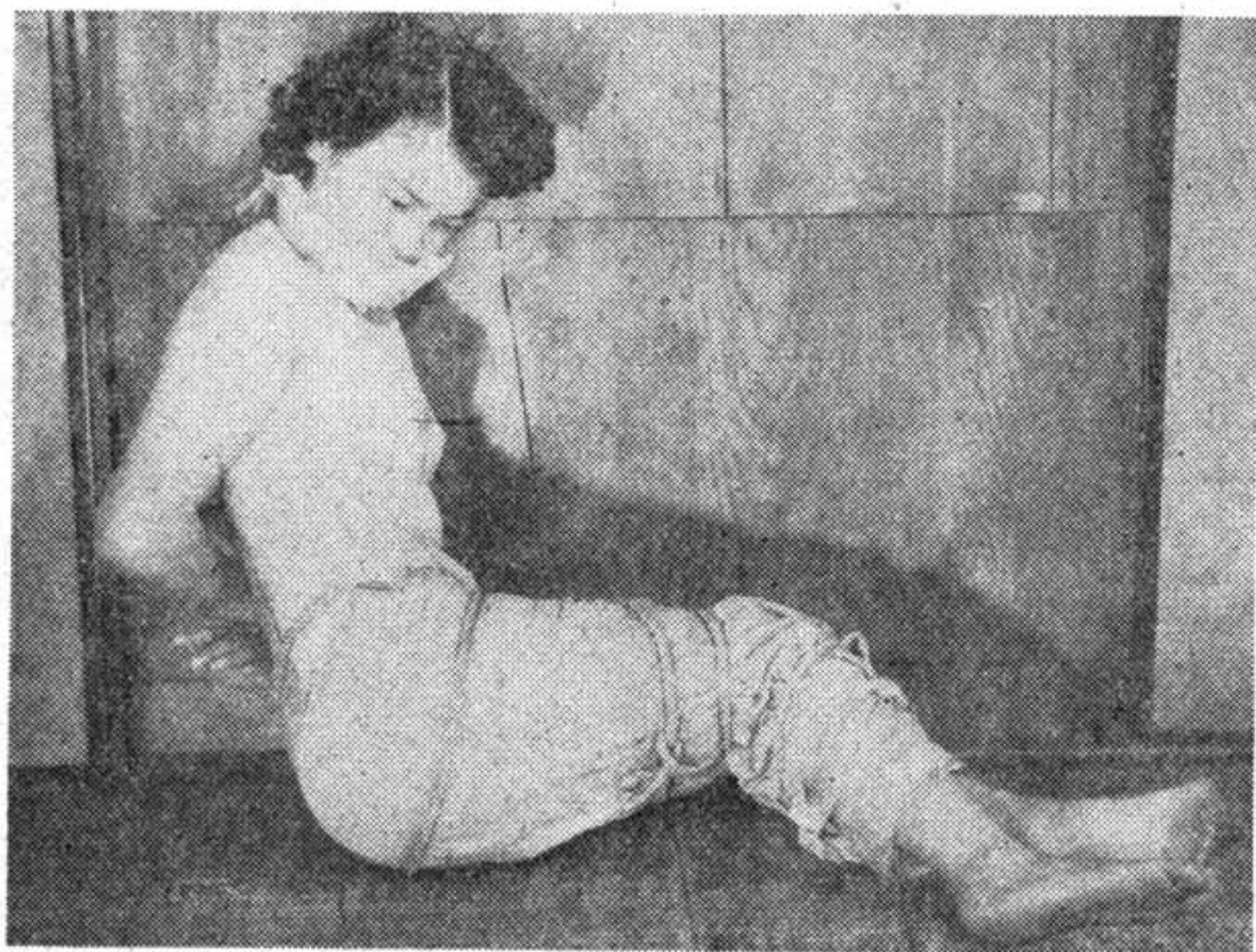
川端さんは勤務の都合から、大抵は日曜日と定めてあったが、はては自ら進んで如何なる日でも、編集部側の要求に応じる様になって、遂には度々欠勤するところから、勤めをやめねばならなくなって、あっさりとその会社を退社してしまった。

二十七年九月号（羽村さんの狂い咲くカンナが掲載されていた）辺りから二十八年六月号辺りまでの緊縛写真は、あたかも川端さん一辺倒になっっているし、二十八年九月号に発表された、緊縛美のオンパレードの

特集は、いかにその間、川端さんを緊縛し続けてきたかを物語る集大成でもある。川端さんの緊縛によってその後の雑誌奇譚クラブの

次第にマゾの兆候をあらわした頃

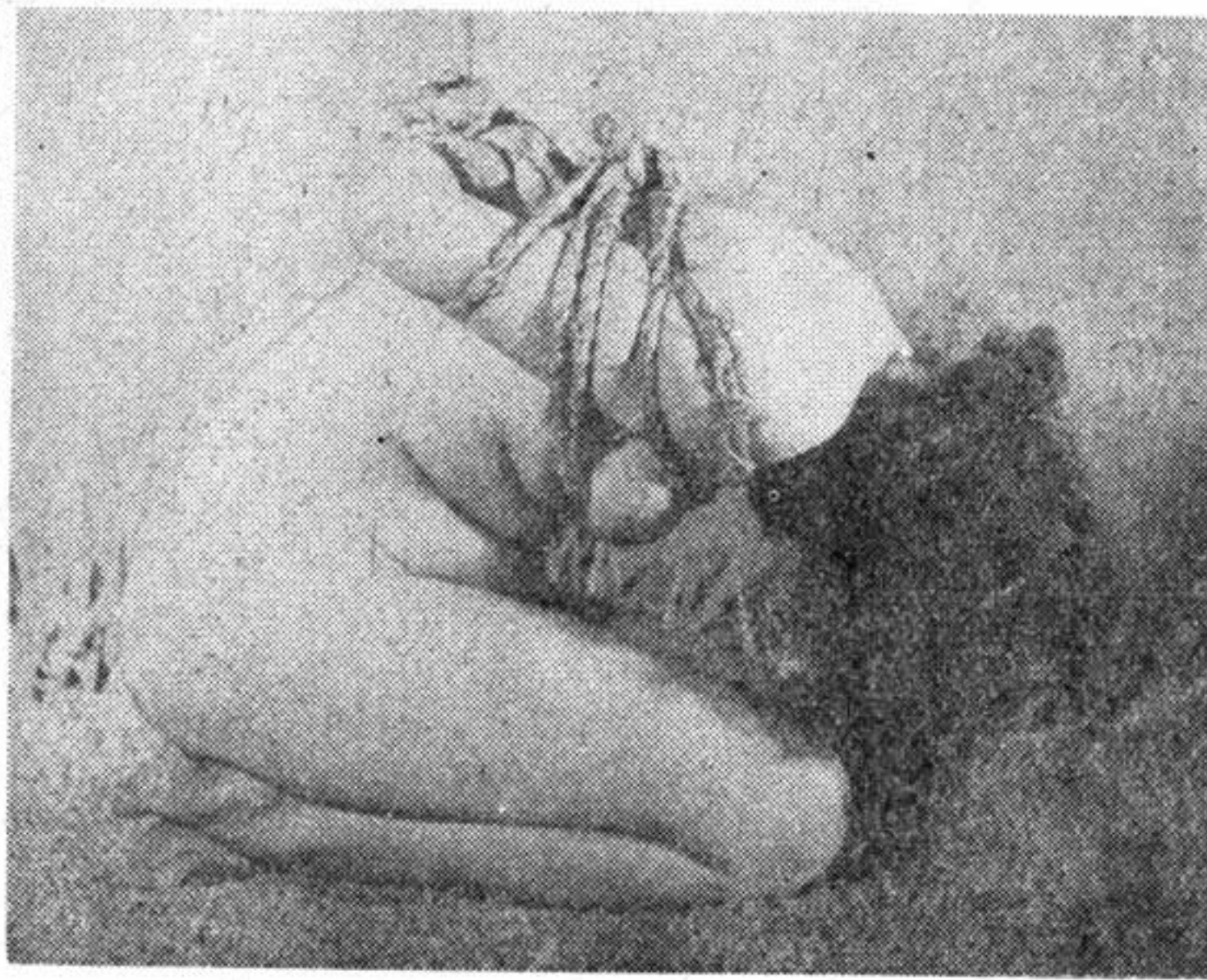
（川端多奈子嬢）



在り方、行き方を決定したと云っても過言ではない。それ程に川端さんの緊縛のポーズは読者に反響があったのである。

勿論それ迄にも立花さんや僅か一回限りで終った人達は、外数人、緊縛の写真も撮るには撮ったが、到底川端さんのものに較べては

完全にマゾ化した頃（川端多奈子嬢）



序の序にも行きつかない、ほんの形式程度なものだけだった。

けれど読者は、より以上の変化を求めたがる。いつも同じ川端さん許りに、漸く飽かれ出したと気付いた編集部側は川端さんに代る嶄新なモデルを探しにかかった。事実、緊縛を要求し、緊縛にのみ生甲斐を感じている川端さんの存在は、編集部としても重荷となりつつあったのだ。

自然、川端さんを使わぬ日々が続いて、新たなモデルの登場で、編集室がそれに力を入れ出したのが、彼女には手にとる様に分った。彼女は瞭らかに焦燥し、落胆し、皆が自分のマゾの亢進を恐れて躊躇している事には思い当らず、恨む気配すら見せた。

頻々とくる読者通信を整理するうち、彼女は淡路島岩〇の読者某氏の川端礼讃とモデルになってほしいという声にひかれ、やむにやまれぬマゾの吐け口をそこに見出し、又一つには儚ないレジスタンスから、編集室には内緒で便りを出したらしい。

本年の七月末、川端さんは、突然

故郷の四国へ結婚するという理由で帰った。

それから、約三ヶ月許り経って、旅館らしきベッドにひしひしと緊縛された、川端さん自身の裸身のあられた素人撮りと思われる照明の不備な密着写真三葉が、編集室宛に送られてきた。宛名の文字は正しく川端さん自身の筆跡である。一行の文すら書かず、この緊縛の写真のみ三葉を送って寄越した、川端さんの心境は奈辺にあるのだろうか。

故郷の四国に落着いて結婚したということだが、単純で素直で、寧ろ愚直とも云える川端多奈子さんは、今、この広い青空のどこかでこの一文を、どんな気持で読んでいる事だろう。彼女の多幸を祈ってこの項のペンを置こう。

——杉 美 美——

杉さんは数あるモデルのうちでも、一番肉体が貧弱で目方も軽く、おッパイも小さくて所謂ポリウムと云うものが全然ない。

それでいて、彼女の化粧は最も巧みで、見る人をして惹きつけずにはおかぬ、カメラフエイスをつくり出す妙味を持っている。

下手な化粧をするより素顔の方が綺麗な伊吹さん辺りから較べると、杉さんは職業柄、きめの荒い肌や、鼻の線が、メーキャップに

よって、実に生々と浮彫され妖艶味を帯びてくるから大したものである。

始めて杉さんに逢った時も、彼女は些かも憶した風はなく、平気で私に会釈した。

撮影場所に到着して、カメラの準備を整える間、彼女はショルダールバッグから、数葉のヌード写真を取り出して私に示してくれた。

人に見せうるだけの自信を持っていたのだろう。勿論単なるヌードだけのものではあったが……鉄環やナイロン縄の縛り。それに襲われる女の、縛られる迄をシリーズとして、一枚々々順序を追って撮ったのも、杉さんが初の試みであった。

最初、私が黙って縄を数条出した時、杉さんは一寸いつもとは勝手の違った表情で、マジマジと私と、握られた手許の縄とを交互に見つめていた。

「一体どうするの？ 何だか気味が悪いわ——」

杉さんは箕田氏に、大丈夫かしらと云う不安な表情をして見せた。

「単なる今迄式のヌードでは、既に飽かれていますね。縄はいわばアクセサリーだよ、心配いらないから——。痛かったら云ってくれればすぐ解くよ。さあ——」

彼女には、川端さんの様なマゾ傾向は余り見受けられなかった。緊縛ヌードも彼女にとっては、箕田氏の云うアクセサリーと単純に考えたのかも知れない。それで、少々強く縛っても、不自然なポーズに緊縛しても敢えて逆わず意の儘になってくれた。

お灸を据えたのは杉さんが始めてだった。

「熱くないかしら——。お灸なんて据えられるの、私生れて始めてよ……」

「大丈夫、パチリとやればすぐ火を消すからね。これもアクセサリー——」

総てアクセサリーで片付けてこんな条件のもとに「灸責めの女」を撮る事になった。

私も事実、今迄灸を据えた経験がなかったが、人聞きや、見様見真似で、糊で固めた大きな艾を、杉さんのお臀にとれぬ様やっこさくっつけ、線香で火を点じた。

艾の燃える匂いが鼻をつく。カメラの位置を定め、ポーズをつける間も、艾はどんどん燃



杉英美嬢の緊縛フェース（初めて縛ったとき）

えて、

「あッ、あ、熱ッ——とって、とって……」

と、ものの二分も経たないうち、早くも火は彼女の皮膚に迫っていた。咄嗟に慌てて、ぐっと火のついたのをその儘握みとると灰皿に捨てたが、成程杉さんの熱がるのも無理ではなく、既に皮膚のその部分は、桃色に赤く色づいていた。

「懲りこりよ、こんなの……」

後手に縛られた杉さんは、恨めしそうに腰を曲げてその個所を見つめて、真実やり切れぬ様な顔でつぶやいた。

それを漸くなだめて、数枚撮った灸責めの構図も、背景の悪さから、も一つ映えなかったのは残念であった。

その杉さんも、三人連縛の時は、最も積極的でリーダー格であった。

もともと二人の連縛を撮る予定であったが万一に一方が都合悪い場合を考慮して、杉さんの外、村田、坂口の諸嬢にも連絡しておいた処、その日は誰も皆都合がついたのか、次々と三人共皆来てしまったので、今更一人だけ帰れと云う訳にも行かず、急拠予定を変更して三人連縛となったが、流石に構成もたじたじの体で、金のかかった割にいいものが出

来なかった。

互いに初会同志の事とて、相手を牽制し合ってたか、もじもじして、誰も脱衣しない。杉さんはその時、思い切った様に、

「三人で縛られるんでしょ。ぐずぐずしていつまで経つ許りだわ。始めましょうよ」と躊躇する二人をせき立てるようにして、構成、撮影者側に背を向けると、逸早くパツとシユミーズを捲くり上げた。

三人を漸くにして縛り終り、パチリとやっかかと思うと三人を解き、又改めて縛り直してポーズをつけると云う重労働で、あの時は真実、私はヘトヘトに草臥れた。

若い裸女三人を自在に縛るなんてと、諸氏に羨望されそうだが、初会同志の彼女達の気持を付度しつ々の行動は、多人数の緊縛が如何にやり難いかわつくづく思い知らされた。

杉さんと村田さん、村田さんと坂口さん、杉さんと坂口さんと、こうしたコンビによってサドとマゾの対照のものを撮ったが、誰の場合も縛られた方が気楽そうで、反って縛らずに、縛った女を責める者の方がやり難そうにぎこちなかった。

所詮、女性は先天的に受身の立場にあるものだろうか——。(春日さんの如き特殊な例

もあるが……)

杉さんは特に困った顔付で、ポーズもぴったりと来なかった。坂口さんが一番まじった様だ。

その折、手の空いた一人が、じっと私の構成振りや、二人の態を傍らで眺めているのが何とも眼障りでならず、その気持が私の動作を抑圧して、意の儘にならぬ事夥だしかった。

前後三回程杉さんを緊縛したが、話がブレイクに触れると、巧みに話題を外らしてしまうので彼女に関しては詳しいこともわからなかったし、又知ろうともしなかった。

支那料理や油濃いものが好きで、撮影後はよく支那料理を食べに行く慣わしだったが、快活に喋べる杉さんが、一旦ブレイクの事になると、亀の子の様に首をすくめ、舌を出して笑ってごまかしてしまう。

三人連縛が終わってから杉さんが一番軽いところから、彼女独りを滅多に縛って、他の両嬢で吊り上げたり逆吊りにしたりしたのが身にとたえたのか、縄をといてからも暫くはじっとした儘起き上らなかった。

(未完)